

十一時間目

俺たちは【学園】で《蓬萊会》ほうらいかいを迎え撃つ準備を始めた。

交渉が決裂した事、連中が襲撃してくるだろう事を伝えると、マリオンは覚悟を決めたらしい。

むしろ勇んで、この【学園】の籠城用改修計画書を俺に見せてきた。

——素人なりによく練られている。

というのが俺の第一印象だった。特に出入り口をすべて小さく改修する発想は面白いと思った。籠城側が女子供で、襲撃側が男連中なら、籠城側が物理的かつ一方的に動き易くなる。原始的な手法の方が確実という典型である。

ただ、これは大柄な『俺』の存在を前提としていない。つまり、俺が来る前から、思案していたのだろう。

それでも、俺が幾つかの修正箇所を示すと、マリオンはあっさり受け入れ、美少女達に実行させる。改修工事には不可逆的なものも多いので、実行前にプロの戦術指導を受けたかったらしい。

「まるでグリーンベレーだな……」

俺は戦闘インストラクターという言葉を避けて、自嘲をしていた。

しかし、マリオンはむしろ素っ頓狂な事を言う。

「そう？ あたしはむしろ学園祭ってかんじだけど？」

「はあ？」

勿論、俺達は祭りの準備などしていない。

繰り返すが、蓬萊会ほうらいかいを迎え撃つ準備をしているのだ。

さらに娘たちの中には改修工事のため、制服を脱ぎ、タマゴロモに戻っている者も多い。どこをどうとつても学園祭を連想させる要素は無い。

だが、言われてみると、少女たちが改修工事に勤しむ姿はどこか楽しそうに思える。

「祭り……か」

美少女たちの改修工事は試行錯誤の連続だった。この手の工事に慣れている俺の目から見れば、明らかに無駄が多い。単純な溶接一つに一時間もかかったりしている。

無理もない。この娘たちも学園の改修工事など初めての経験だ。教本はネットや図書館から引き抜いたし、最悪の場合は俺が教えるが、経験不足はどうしようもない。

この【娘たち】が初めて見せる無様な姿だ。

しかし、それが若者らしく、イキイキと輝いて見える。

——なるほど、これは≒マリオンプラン≒初めての学園祭というわけだ。

考えてみれば、マリオン自身もまともな学園生活を送っていないはずだ。何しろ、若干十六歳で≒マリオンプラン≒を任されたのだ。一般的な学園生活を経験する余裕があったとも思えない。だからこそ、娘たちの青春を……

「ほらほら見て見て。美少女が小さく引き締まったお尻をツンと突き出して……ああっ、これが青春よねえ……」

「……」

俺が沈黙していると（最近、見分けられるようになった）エムファイフティーンがやってきた。そして、金髪碧眼美少女曰く。

「頼まれていた独立電源の必要数は割り出せました」

そして、彼女は印刷された用紙を差し出し、俺はそれに目を通す。

何と言っても、LIC / 低烈度紛争地域だ。発電所からの送電は期待できない。ただし、この飛天市はこういった状況も想定して、各々の施設に独立した発電機が備え付けられている。この【学園】も例外ではない。

そして、そのおかげで、俺達は今日まで近代文明的な生活を謳歌してきた。

だが、もし、蓬莱会が攻め寄せれば、この【学園】内の送電網も寸断される。俺が襲撃側ならそうするし、秋田もまたそうするだろう。その時に各種の基幹生活設備インフラを維持する必要がある。だから、この【学園】内でもさらに独立した電力源の確保が不可欠となる。

よって、その必要数を割り出させていたのだが……、

「思ったより多いな。で、これに相応しい量の石油燃料もいるわけか……」

俺が頭を抱えていると、エムファイフティーンは不思議な顔をする。

「結晶燃料の備蓄は十分にあります。それを液晶化して使えばよろしいかと」

「ここでも液晶燃料を使うのか？」

「何か問題が？」

「液晶燃料なんて、所詮は石油燃料の代用品だろう？ そんなものを精密機械に入れて、いざという時に故障したらどうする？」

「？ それを言ったら、何も使えないではありませんか……？」

目の前の金髪美少女には意味がわからないらしい。

しかし、これにはマリオンが助け船を出す。

「ヤヒヤー、あなたに職業柄の保守性から、液晶燃料の信頼性を疑っているのはわかる。」

でも、この飛天市では液晶燃料も『市場の試験』を十分に受けた。既存製品との互換性が確立されていれば、結晶燃料を直接電源にしたいぐらいなんだから」

「……」

「そもそもさ、あたし達にしろ、あの連中にしろ、何でこの街に残っていると思うの？」

「……原発で産み出した電気エネルギーを結晶細胞の化学エネルギーに変換し、保存運用——この『人工石油』によるエネルギー革命だけでも、この飛天市には投資価値がある
と？」

「ええ。それに結晶燃料は石油燃料よりも、成分率は純粋で、化学式は単純よ」

「……いやそれこそどうでもいいだろ。揚水発電所みたいに不便な位置エネルギーで保存する必要がなくなる方が凄くないか？」

俺は内心不満たらたらだったが、ここは妥協する事にする。実際、マリオンたちの言い分には理がある。

「わかった。燃料はそちらに統一する。だが、交換部品はこちらに任せてもらうぞ」

「三次元印刷されたネジなどの強度が足りないのは認めますが……」

「足りないのは強度ではなく、精度だよ」

俺もここは譲れない。この点は三次元印刷にはまだ実績が足りないからだ。

「しかし、肝心の補給がないのでは……」

「安心しろ。補充部品は《にのみやしゅほ二宮酒保》——俺のツテで頼んである。貴様ら三十六人向けの銃火器その他武装についても、今日中には届く」

「……！」

俺の言葉にエムフィフティーンのみならず、金髪碧眼美少女達が一斉に沸き立つ。

そこにははつきりとした喜色があつた。

勿論、これは三日前から予定されていた事である。ただし、公表はあえて控えていた。こういうのは切り出す時機が重要なのだ。下手に予定を公表し、いざその時になっても、補給が届かなければ、士気は激烈にまで落ち込む。だから、時機を測っていたのだ。

そして、予定が順調という連絡が入り、到着がほぼ確定となったので、満を持して公表した。その結果、士気が向上した。俺の目論見は大成功と言っている。

しかし、無邪気に喜ぶ【娘たち】に俺はむしろ苛々する。

——小娘どもめ……。人殺しの道具がそんなに愉しみか……？

もつとも、さすがにマリオンだけは顔色が暗い。

「……頼んでおいてなんだけど、少し意外ね」

「何がだ？」

「いや、ヤヒヤーなら、『子供に銃を持たせるな!』って怒るかと思ってたから……」

マリオンの暗澹たる表情は、それが予想ではなく期待であった事を示唆していた。

「……今でも怒っているさ」実際、俺は齒がゆい思いだ。少年兵がいかに社会に悪影響を残すかは今更言うまでもない。「だが、俺が殺意と共に銃を握ったのも、十二の時だったからな」

「そう……」

マリオンの目をつむった。何を考えているかは分からない。

逆に俺はあえて【娘たち】へ伝えておく。

「だが、期待するなよ。貴様らには一定才能があるだろう。俺も俺なりに全力で指導する。しかし、所詮は付け焼刃だ。限界がある。大体、俺自身そんな大した腕前でもない」

すると、今度はエムイレブン（さすがにこいつは個体識別できるようになってきた）が、俺に訊ねてくる。

「マスターは『現代のシモ・ヘイへ』ヤヒヤー・イブン||ザカリヤーなのでは？」

「……あのな、俺は一度でもそんな自称をしたか？ それは呉羽くれはの馬鹿が吹聴しているに過ぎんぞ」

俺はいい機会だと思い、はっきりと伝える。

だが、エムイレブンは食らい付く。

「では、吹聴される原因がマスターにはなかったと？」

「……いや、たしかに俺は狙撃もできるが……」

「本家シモ・ヘイへも狙撃手だったと聞きます」

「あのな……まあいい。では、貴様はシモ・ヘイへがどういう男だったか知っているか？」

「ざっと調べただけですが、約百年前の冬戦争で活躍した狙撃手でしょう？ スナイパーライフル 狙撃銃に

よる公式戦果だけでも五百人以上を射殺。これは今なお世界最多記録。同時に サブマシンガン 軽機関銃の名手でもあり……」

「そのくらいだ」

「は？」

「俺もライフルとサブマシンガンを得物にしていた。共通点はそのくらいだ。それで多少戦果をあげたら、呉羽が調子に乗って吹聴し始めたんだ。シモ・ヘイへを例に挙げたのも、あいつがシモ・ヘイへ以外に狙撃手の名前を知らないからだよ」

「……」

つまりは牽強付会である。あの ペヒラヤヤ・スニヤチ 白い死神シモ・ヘイへ——というより、彼を含む数

多の伝説的狙撃手たちと、俺の共通点はむしろ少ない。彼らのほとんどが猟師の出で、幼い頃から狩りの技を磨いてきたのに対し、俺は十二まで銃器に触った事すらなかった。それだけではない。俺は治安がよく、利便で、豊かな都市居住者だったのだ。狙撃手としても一兵士としても、適性は最悪に近い。

俺は皮肉な気分になった。

シモ・ヘイへは狙撃技術の秘訣を聞かれた時、『練習だ』とただ一言で答えたという。正論である。役に立たない正論の典型である。シモ・ヘイへ自身のように物心付いた頃に銃把を握り、雪原や砂漠に潜み、空を翔る鳥を撃ち落していたなら、日常そのものが練習だっただろう。しかし、質問者にしろ、俺にしろ、皆が知りたいのは『そうでなかった者たちが、出遅れた分をどうすれば取り返せるか？』なのだ。

——…そんな事は不可能なかもしれんな……。

教養も語彙も乏しかったシモ・ヘイへに、多分その辺りを論理的に説明する事が不可能だったように。

「実際問題、ライフル狙撃ならともかく、サブマシンガンなんて、誰が使っても大差ないと思うぞ」

シモ・ヘイへはサブマシンガンの達人でもあったという。正直、俺には理解できない。近接して撃ち合っているのに、自分は無傷で相手だけ殺傷出来るなど、胡散臭い事この上ない。スロ・コルツカもそうだが、フィンランド軍が戦意高揚のために水増ししたのと、勘繰っている。

「…結局、俺一人ではどうやっても手が足りん。だから、貴様らを仕込むんだよ……」俺はマリオンとその【娘たち】を見渡す。

「失望したか？」

「いえ、興奮してきました」

なるほど、マリオンの言う通りだ。これは祭りの一種なのかもしれない。エムイレブンの頬は赤く染まっていた。

「——やはり、運命は自分の手で切り拓けというわけですね？」

それははるか古いにしえにアレクサンドロス大王アレクサンドロス大王が結び目を切った時の台詞だった。既に使い古された台詞だった。しかし……この少女達が言うのと妙に新鮮に聞こえるのだった。

十二時間目

深夜23時——。

打ち合わせされた『今日中』の定義ギリギリで、二宮酒保にのみやしゅほからの電話連絡が来た。

『荷物一式は十分以内に、そちらの【校舎】へ【着陸】させるわ』

二宮酒保にのみやしゅほ——というより、二宮朱乃にのみやあけのの声は高度なデジタル暗号化されていても、幼さが目立っていた。

「助かる。……一応聞いておくが、俺達を回収するのは不可能なんだな？」

『不可能』彼女の返答は相変わらず明晰だった。『今私がつっている装備は配達専門で、回収は不可能。火・星・に・荷・物・を・送・る・事・は・で・き・て・も、火・星・か・ら・資・源・を・持・っ・て・く・る・事・は・出・来・な・い・の・と・同・じ・。そちらの治安が相当悪いなら尚の事』

「……やはりか……」

『仮に輸送ヘリの類を調達できたとして、そちらの校庭に着陸させた挙句、40人近くも回収できると思う？』

「いや……無理だろうな」

俺は校舎の外を監視装置越しに確認した。

ぐるりと囲む人員の姿がはつきりとわかる。……威圧の意味もあるのだろう。

時間の経過と共に、蓬莱会による【学園】包囲網は強固になっていた。今ではステインガミサイルに似た携帯型地对空ミサイルを持った男達も珍しくない。これでは36体をヘリに乗せる事自体が難しい。上空から低速で接近した時点で、余裕を持った警告の後、撃墜されるのがオチだ。

——こんな事なら、籠城など考えず、多少強引でも即座に脱出すればよかったかな？
そうすれば……。

そこで俺は首を振った。

蓬莱会は蓬莱会で、今の俺達と似た様な後悔をしている事だろう。着々と防備を固める【学園】を見ながら、思うのだ。しまった。こんな事なら、包囲の形成など考えず、多少強引でも即座に強襲すればよかった。そうすれば……と。

——結局、俺も秋田も頭でつかちなんだな……。

だから、何事も十分に準備するまで、行動を始められない。東洋風に言うなら、巧遅に陥り、拙速を欠ける。……こういう時は突撃馬鹿の呉羽を見習いたくなる。

『……老婆心ながら聞いておくけど、本気で籠城戦をするつもり？』

「ん、ああ。向こうは校舎を破壊するような装備は使えないはずだ。単純にそんな強力な装備は手に入れ難いし、目的は【娘たち】の回収だ。【娘たち】を殺傷する武装は使用が制限される。前線の蓬莱会が血気に逸る事はあるから、俺がA H A首脳部なら、そも強力な武装を給与しない……。まあ、籠城戦と言うよりは塹壕戦になるかもしれないが、

勝算はあるさ」

『そう……』

二宮朱乃は沈んだ声だった。俺の推測が推測に過ぎないことを理解しているのだろう。しかし、その上で不安を煽るまねをしたくないのだ。

「朱乃」

『何？』

「ありがとう」

『……あたしの男性恐怖症はまだ治っていないわ』

そう言つて、電話は乱暴に切られた。すると――

「朱乃……つて、誰？ またまたまた女の名前にも聞こえるけど？」

マリオンは何故か凄まじい視線を送ってきた。心なしか、他の少女たちの視線も冷たい。

「いや、あいつは……」

「で、女なの？」

「……ああ、二宮朱乃は女だ。その何が悪い？」

「いくつ？」

……そういえば、彼女は今何歳だ？ 呉羽もそうだが、東洋人の年齢はわかりにくい。

「いくつ？」

「は、初めて会ったのは、彼女が十六か十七の時だったと思う」

俺の答えにマリオンが甲高い声を出す。

「……へええええええ……」

ここでエムイレブンが口を挟む。

「ドクター、質問をよろしいでしょうか？」

「許可するわ」

「傭兵の女性比率は高いのでしょうか？」

「いいえ。低いわ。詳しくは知らないけど、男社会のはずよ。そうよね？」

「いや、最近は後方配置でなら……」

「それでも十代の女の子なんて、皆無に近いんじゃないの？ 少なくともまともなPMC

Private Military Company

(民間軍事会社)ならさ」

「……その通りだ」

「そんな中でもマスターの相棒は常にうら若い乙女だったのですか？」

「……その通りだ」

「……へえええええええ……」

「なるほど。勉強になります」

再びマリオンが甲高い声を上げて、エムイレブンまでがそれに追従するのだった。

高度飛行中の無人輸送機からの物資自動投下技術は素晴らしかった。

使い捨て同然の片道切符とはいえ、【校舎】屋上へと正確に投擲、落下傘パラシュートで軽減しつつ、静音で着陸させた。これはすべて闇夜に紛れての話だ。無音とはいかないので、蓬萊会は気付いているだろうが、時間と位置が特定されている以上、こちらは迅速に回収できる。向こうが気付いた時にはもう遅い。

——このプログラミングを自力でできるだけで、やはり二宮朱乃は大したものだ。

衛星軌道上への投入を思わせるが、乱数が多い大気圏内でこれをやるのだから、技術的にはより高度である。あの《シシオウシステム》をぶっつけ本番で使いこなしたのも偶然では無いのだろう。

場所を実験区画を改修した即席射撃場に移す。

そこで俺は銃器講習第一陣——【娘たち】第一世代十六歳六名を前に説明する。

「これが何かわかるか？」

「カラシニコフ——世界で最も有名なアサルトライフルに見えます」

「そうだ。細部は改良されていても、基本設計は1947年から変化していない——今時珍しいイジェフスク工場の純正品だよ」

俺も第三世界暮らしが長かった。よって、いわゆるカラシニコフ信奉者だ。今でこそ、諸般の事情で別の高級狙撃銃を使っているが、狙撃版カラシニコフとも言えるドラグノフ狙撃銃を握っていた時期の方が長かった位だ。

「しかし、予習はしているようだな……。では、カラシニコフの特徴を言ってみろ」

「旧ソ連の軍用自動小銃で、扱い易く堅牢、手入れも簡単。そのために、旧共産圏と第三世界で普及。設計上、集弾率はやや劣るものの、その圧倒的な信頼性から、アメリカ合衆国等でも需要があり、亜種も多数派生。世界に拡散。工業製品としては極めて高い評価を

受ける一方、その扱い易さから少年兵などに用いられ易く、紛争を長期化させる原因とも言われ、『小さな大量破壊兵器』と非難される事も多い……」

スラスラと語った後、しばらくして付け加える。

「……これから、我々もその『紛争を長期化させる少年兵』になるわけですね？」

俺は苦笑した。この人形じみた金髪碧眼美少女も言うようになったものだ。

「そうだ。これから貴様らには百メートルまでは必中できるようになってもらう」

「「「了解」」」」

金髪碧眼美少女六名は一斉に返事をする。この辺りの規律はさすがだ。

「では、まず構えてみる」

俺が指示すると、彼女達はぎこちなく、カラシニコフを構える。これもまた取り寄せた資料で予習しているのだろう。ぎこちなくはあったが、概ね正しく構えている。

……この頃には、俺もこの娘たちの表情がわかるようになってきた。それが俺の理解が進んだからか、彼女たちが心を開くようになったのかはわからないが……。

「何か意外か？」

「いえ、想像していたよりも軽いので……」

「錯覚だ。実際には四キロある。所詮は旧式。最近の銃に比べれば、むしろ重い」

「そうなのですか？」

「ああ。それもカラシニコフの特徴だな。設計上の重量配置が絶妙なんだよ。扱い易いと言いで済まされるが、その理由は部品数が少なく故障率が少ないからだけではない。いや、整備がし易いというのは重要だ。しかし、実際の重さに比べ、軽く感じる程の構え易さ、撃ち易さも大きな理由なんだ。設計理念の時点で『女子供にでも扱える』というのが盛り込まれているのだろうな。これは基本設計者のカラシニコフ^{シャイフ}先生が対独戦の中で……」

「「「……」」」」

「……余計な話だった。好きな形で撃ってみろ」

俺はまず自由に撃たせてみる事にした。

事前の予習は済ませている連中だ。発砲直前まで引き金には触れないようにしている。まして『銃口を覗きこまない』『冗談でも味方に銃口を向けない』等の基本は弁えている。ならば、実際の発砲経験を重んじるべきだろう。

そう考えた俺の指示で【娘たち】は引き金を引く。

久々で、どこか懐かしい独特の発砲音が鳴り響く。

俺は金髪碧眼美少女達の真剣な練習風景を見ながら、

——……マリオンがいなくてよかったな。

と、場違いな感想を抱いた。これは安全上の問題だけではない。

この【娘たち】は……その巨乳揃いだ。しかも、肌張り付く、極薄のタマゴロモ姿である（事故の際に生体記録を確認出来た方が便利なので、俺も推奨せざるを得なかった）。

ハンドガン
拳銃を両手で構えただけで、乳房が圧され、強調された。

ライフル
小銃を撃つ時には、さらに脚を広げるので股間が見える。

立ち撃ちなら、銃撃の反動で胸が揺れる。

伏せ撃ちなら、銃撃の反動で尻が揺れる。

——あいつがいたら、絶対にいかがわしい発想をするに違いない。

五分程で、【娘たち】は最初に与えた弾薬を使い果たした。

その結果、百メートル先の等身大目標は穴だらけになっていた。ほぼ全弾丸——少なくとも見積もっても九割——命中している。初弾を外す者、発砲を続けるうちに銃口が上がってしまう者はいたが、すぐに自力で修正して命中させるようになる。

二、三個目の弾倉に手を伸ばす頃には命中率十割も珍しくなくなっていた。

「あの……この距離だと……誰が撃ってもあたりませんか……これ？」

「そうだ。カラシニコフがそれだけ優れた銃という事だな」

「いやしかし……」

「また、これは単に目標が止まっているからだ。身を隠しつつ動き回られれば、こうはいかん」

俺が言うと、【娘たち】は何とも形容し難い容子になった。

「と、同様に『敵』も同じ条件で当ててくる事を覚悟しておけ。貴様らがこの学園に引きこもっている間も、『敵』は外で荒夏事変や飛天紛争を生き抜いてきた。この実戦経験は侮れない」

空気が引き締まった。この意味が理解できるらしい。ただ、あまり緊張されても困る。だから、俺は珍しく冗談を言ってみる。

「ただ、カラシニコフといえども、誰でも即時必中とはいくまい。すぐに習熟できるのは貴様らが基本的な運動を怠らなかつた証だ。これが我らのドクターIIマリオンなら、この距離でも当てられないだろうな」

しかし、金髪碧眼美少女達は無表情を貫いた。そして、その原因は背後からやってくる。「聞こえているわよ」

言うまでもない。我らの『女王』マリオンだった。
「何の用だ？」

「頼まれていた戦闘服が完成したわ」

「よし、M12からM16は今後一時間かけて習熟しろ。命中させる事は勿論だが、弾装交換まで、あらゆる状況で円滑に行えように身体に沁み込ませろ。その後、それぞれ第二世代から第六世代に指導だ」

「了解」

マリオンが結晶細胞溶液から、その改良型タマゴロモを取り出す。

「名付けて、ヴァイタルスーツ！」

「ありがちな名前だな」

俺は小声で突っ込んだが、変に回りくどいタマゴロモよりは、いい名前だと思った。

それに感謝も尊敬もしていた。俺が『防弾繊維が欲しい。それも【娘たち】全員分』と要求したのは一昨日の事だ。わずか二日での完成——マリオンも本来は専門外という事を考えれば、偉業と言っている。

なお、このヴァイタルスーツなるものを簡単に説明すると、既存のタマゴロモを何枚も重ねたものらしい。元々、タマゴロモは強靱な繊維でできている。構成を調整するだけで、日本刀の斬撃や拳銃弾の直撃にも耐えられるという。

「勿論、測定性能は維持したまま！ その分、ちよつと分厚くなっちゃったけどね」

なるほど、このヴァイタルスーツにはフロントジッパーがついていた。タマゴロモ程の薄手では不可能な話だ。しかし……

「いや、まだ全然分厚くないだろ。もつと厚くてもいいだろ」

さらに言えば、思い切って測定性能も削っていい気がする。マリオン曰く『健康管理に絶対必須』との事だが。……マリオンが娘たちの生理記録を見てニヤニヤしているのを見ると、別の目的があるように思えてならない。

「これでもタマゴロモ繊維を重ねる時に工夫して、非ニュートン流体化させてあるのよ。

ダイラタンシー効果で、理論上だけど、44マグナムまでほぼ無力化できるわ」

「いや、技術的には凄いなと思うぞ。その厚みを考えれば、魔法みたいな繊維だよ」

「でしょー。おかげでタマゴロモ本来の筋電位増幅機能は完全に喪失しちゃったけど」

「だが、ライフルが止められないのでは中途半端だろう。もつと重ね着させれば……」

「問題一…動きが鈍くなる。せつかく狭くした出入り口を活かせなくなるかも」

「それでも既存の防弾装備よりはずっと動きやすいはずだ」

「問題二…防弾性能をいくら上げても、運動エネルギーそのものが消滅するわけではない。どの道、衝撃で致命傷になりかねない」

「…しかし…」

「問題三…あたしが生成できるのはあの厚みが精一杯」

「は？」

「結晶細胞って、分子アセンブラジみているけど、万能ではないのよ。元々、タマゴロモ織維は甲冑式異形の『下着』として設計されたわ。筋電位等の測定機能も、やたらと薄いのもそのため。だから、逆に厚くするのが難しい分子構造なの」

「??? どんな構造だ、それ？」

「知らない。その辺り機密だったし。あたしも専門外だし」

「…」

「勿論、時間と人材があれば、解決する問題かもしれない。けれど、今は両方ともない。ヤヒヤーがあたしを買い被ってくれるのは知っているけど、無理なものは無理」

マリオンはきっぱりと言った。学者としては嘘を言えないし、母親としては娘を危うい目に遭わせたくない。そんな思いが伝わってくる言い方だった。

「ただ、手甲足甲に加工できそうな結晶細胞の資料自体はあった。あれなら、ライフルも防げると思うから、そっちで試作はしてみるわ」

「…：わかった。それでいこう。俺の防弾装備も参考にして見てくれ」

「はい。じゃ、皆はさっそく着替えてみて」

マリオンがいきなりその場にいる【娘たち】に言った。

美少女達は躊躇わずにタマゴロモを脱ぎ、ヴァイタルスーツに着替える。言葉にするとそれだけだが、両方とも下着を付けない構造なので、年頃の少女たちの一糸纏わぬ艶姿が自然あらわになる。

「だから、俺の前で裸になるな…：！」

俺はいつものように怒鳴った。

が、この日はいつもと少し違った。

エムイレブンがタマゴロモのままだったのだ。いつもなら、真っ先に脱ぎ始めるのに。何故か透徹した視線をこちらに向けている。

おまけに奇天烈な事を言う。

「マスターは我々の裸を見たくないのですか？」

「は？」

「マスターは我々の裸を醜いから忌み嫌っているのですか？」

「いやそういうわけでは……」

エムイレブンの眼差しは真剣そのもので、隣のマリオンがケラケラ笑っている。

俺はいたたまれなくなって、視線を逸らした。

幸いにも、他の少女達はヴァイタルスーツに着替え終わっていた。

マリオンの説明通り、このヴァイタルスーツも基本的にタマゴロモ繊維を重ねただけの代物だ。よって、身体の線が出る事には違いない。

ただし、その厚さは0・5ミリから5・0ミリへと一気に増している。

——これでとりあえず目の毒は薄まったか……。

俺はホッと息をつく。これでも十分目の毒なはずだが、この時点で俺の感覚は相当麻痺していた。

すると、【娘たち】の中の一体が不満げな顔をした。発育がよく、乳房が豊かな金髪美少女である。

そんな彼女が胸元のフロントジッパーをジジジと下ろし始めた。

タマゴロモ繊維と少女らしい玉の肌の対比が美しかったが、臍の辺りまで下ろし始めたので、さすがに俺は口を出す。

「止める」

その個体は手は止めたが、頬は綻ばせた。

「何をやっているんだ貴様は？」

「いえ、マスターのドギマギが乏しくなったのが、残念で」

「……貴様は『阿婆擦れ女』か……」

俺が呆れていると、再びエムイレブンが割り込んでくる。

エムイレブンが俺とのその阿婆擦れ女との間に立つ。まるで、俺の視界を遮り、阿婆擦れ女の肉体を隠すような動きだった。

そして、エムイレブンはタマゴロモを脱いだ。俺と目と鼻の先にまでわざわざ近づいた上で、その美しい裸体を包み隠さずさらし始めたのだ。綺麗な形のEカップだとは知っていたが、改めて生で、しかも至近距離で見ると……。

俺は慌ててエムイレブンに背を向ける。

「ど、どういふつもりだっ?!」

「……何となく不愉快でした」

エムイレブンは極めて不明瞭な事を言いやがった。

十三時間目

俺は一口食べて、舌鼓を打った。

「う、美味しいな……」

その日の夕食は鰯ぶりの刺身だった。しかも、マリオンお手製である。

「これ、本当にお前が捌いたのか？」

「誰が捌いても同じよ」

と、マリオンはそっけない。

「小ぶりだけど、冬ものだったし。胃からはイカやコウモリダイが出て来たし、わざわざ神経を切断した上で、血抜きして、丁寧に冷凍してあったし」

「ううむ。それでこの味か……」

俺は少し感動していた。マリオンはこれを刺身にして、不味くする方が難しいと言わんばかりだった。しかし、俺に同じ事をする技能は無い。内心称賛していた。

「しかし、お前がまともに魚を捌けたとはな……」

「あのね、あたしは生物学者よ。手先が不器用でどうするの？」

最近の生物学者なんてコンピューター相手の時間の方が長いのでは？———と思っただけ、実際マリオンはそういう類だろう。しかし、それでも基本は抑えているらしい。

「……それに、娘たちには魚ぐらい、ちゃんと捌けるようになって欲しかったしね」

だから、胃の内容物がわかるような魚が冷凍庫に入れてあったのだという。

「そろそろ、教育素材にまで、手を出さざるを得なかったという事か？」

マリオンは無言で頷き、

「鰯ぶりの残りは味噌漬けにしてある。味は保証する。でも、昆布はもうないから」

「補給は途絶えつつあるという事か……」

いまだ蓬萊会の襲撃はない。が、地上包囲は解かれてない。そのため、あらゆる補給が困難になっていった。勿論、武器弾薬を受け取った時の様な空輸は可能だ。ただ、発着場がないため航空機は論外。低速の輸送ヘリが来ても、《蓬萊会》の携帯型地对空ミサイルで撃墜される。唯一の例外が銃器を運んだ時のような無人輸送機による高度飛行からの物資自動投下だ。が、それで日用品を補充するのは効率が悪すぎる。技術的に未成熟なために一回当たりの費用が極めて高い。あれで日用品まで補充していたら、こちらの資金が先に干上がってしまう。加えて言うなら、そこまでやっても《蓬萊会》が何らかの妨害技術を確立させない保証はない。

つまり、どう足掻いても、補給は残り少ない。

——攻守は逆だが、アフガニスタンに侵攻したソ連の様だな……。

『《蓬萊会》はこのまま兵糧攻めにする気かしら？』

「前近代じゃあるまいし、発電燃料がその前に尽きるさ」

「比喻表現よ。どの道、補給が途絶えた消耗戦は負けじゃないのかって聞いているの」

「消耗戦が辛いのは《蓬萊会》も同じだ」

『『堅壁清野』の現代版と言う事？』

「ああ、そんなところさ」

堅壁清野とは焦土作戦の一種で、言わば、『守備側による兵糧攻め』である。有名なのは日中戦争だが、事例自体は古代からある。第二次ポエニ戦争の持久戦略もこれに類する事ができるから、その概念は古今東西に普遍するのだろう。

一般に攻城戦は守備側が有利だった。そのため、攻撃側は守備側の数倍の兵員が必要になる。数倍の兵員は数倍の速度で食料物資を消費するから、持久戦では守備側がますます有利になる。ここで『攻撃側は外部から、補給物資を取り寄せられるのでは？』となるのは近代以降の話だ。輸送技術が稚拙な近代以前では遠隔地からの物資補給は夢のまた夢。三日分の食料を運ぶ牛馬人員が四日分の食料を食べてしまう——そんな悪循環こそが普通だった。そのため、原則物資は現地調達し略奪するしかなかった。

しかも、守備側はそれを見越して、予め現地の食料物資を城内に運搬しておく。むしろ、近隣の悉くを敵軍に利しない清野。焦土にした上で、堅壁。城内に籠る事が多い。すると、攻撃側は無理な力攻めで戦力を消耗するしなくなる。さもなくば、攻撃側の食料が先に尽きてしまう。——以ってこれを『堅壁清野』というのだろう。

勿論、現代戦で食料輸送は大した問題ではない。近代以前と違って、物資の運搬技術も保存技術も進歩している。一回の補給で何年分ものの食料を確保するのも容易い。ただ、兵器を動かすための燃料は膨大になったので、そちらが尽きる事はあり得る。

発電燃料がその前に尽きるというのとはそういう意味だ。そして……、
「現代戦に必要なのは発電燃料だけではない。ありとあらゆる資源を必要とした挙句——浪費する。まともな為政者が戦争を避けようとするのはそのためだ。とどのつまり、戦争なんて、どう考えても、不経済なんだよ」

「凡用兵之法、馳車千駟、革車千乘、帶甲十萬。千里饋糧、則、内外之費賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金。然後十萬之師舉矣——凡そ用兵の法は、馳車千駟・革車千乘・帶甲十萬。千里にして糧を饋るなら、則ち、内外の費・賓客の用・膠漆の材・車甲の奉・日に千金を費やして、然る後に十萬の師挙がる——って感じ？」

「……日本人は本当に『孫子』が好きだな」

俺は半ば呆れた。とりわけ有名な部分なので知っていたが、マリオンにすれば専門外もいいところだ。

「クラウゼヴィッツの『戦争論』と違って、短いからね。お手軽に読めるのよ」

そう言って、マリオンは大げさに肩をすくめる。こんなところはアメリカ人らしい。

「なら、言いたい事はわかるだろう？」

俺は滔々と説く。

「蓬莱会の側に見れば、この包囲を続ける事自体が負担なんだ。連中は予算も人員も錬度も二流だ。三流とはいえないから、今はきっちり包囲をしていられる。しかし、時間が経てばどうなるか？」

「人間の気力が尽き、不平不満の声が出てくる？」

「その通り。予算が十分なら、包囲を機械化できるし、人員が十分なら、包囲を交代制にできる。しかし、その双方が不十分な蓬莱会は数少ない人員で、手動の地対空ミサイルを抱え、常に気を張ってなければならん」

「あ、そのために見せつけるように『空輸』したんだ？」

「理由はそれだけでもないがな。しかし、こちらにこれ以上の補給を許さないためには、あちらとしては緊張を絶やすわけにはいかん。これは俺の目から見てもキツイ。そして、蓬莱会の実行部隊がこれに耐える程の錬度とは思えんな」

「所詮は社会の落後者だもんねー」

「……」

俺は色々思うところがあつたが「逆に」と繋げる。

「こちらは籠城している側だからな。一定は気を抜く事が出来る。元々、先進国の校舎は緊急時の避難所^{シェルター}として、設計されている。その上、最近の日本では不審者対策なども充実している。そして、この飛天市では政治的事情から、それらの傾向が特に強い。おかげで、校外監視や自衛防衛の装置まで整っている。それでも、校舎自体を破壊できる装備を使われたら、終わりだったが……」

「そもそも目的が【娘たち】の確保である以上、そんな強力な装備は使えない——という賭博的推測に今のところ的中している？」

「ああ。その間に校舎を要塞化する事も出来るし、既にこれはほぼ終わっている。また、【娘たち】の戦闘訓練も順調だ」

「なるほど、校舎に籠城するって、単に中二病のお約束ってわけじゃなくて、それなりの合理性故だったのね」

「?…: 言っている事がよくわからんが、戦術的には好手だと自負している。政治的には【娘たち】への戦闘訓練など、後々の失点に成りえるがな」

そして、俺は監視装置からの報告を携帯端末で再度確認する。

「ただ、蓬莱会とあの秋田という男の性質、そして、現在なされている包囲網の様子から見て、状況をそれ程長期化させる気はないだろう。少なくとも俺なら、持久戦をする時にあんな部隊配置はしない」

「遠からず攻めてくると?」

「ああ。向こうも向こうで、突入作戦準備をしているんだろう。そして、それが完了次第、そして、こちらの戦闘訓練が終わらぬ内に…:」

「校舎内五キロ走破。完了しました」

金髪碧眼美少女の【娘たち】がそう言って食堂に入ってきた。

ヴァイタルスーツを身体に馴染ませるため、校内構造を身体に覚えさせるため、交代で走らせていたのだ。

「よし。では、水分補給をしろ」

「イエス。マスター」

俺の言葉に従い、美少女達は1.5リットル飲料水入りペットボトルを手にする。

そして、【娘たち】が各々水を飲む。

マリオンはその姿をうっとり眺めていた。訓練のため、意図的な負担をかけている。そのせいで彼女達も汗だくだ。それがまた艶っぽく、同時に若さと菜食ゆえの清浄な芳香でもある。さらに繰り返すが【娘たち】は皆美少女で、首から下も婉然たる曲線を描く。そこを口からこぼれた水が汗と共に流れ落ちる様は、なるほど、芸術的だった。

——俺も大分毒されてきたな…:。

内心苦笑していたが、一点看過できない行動に気付いた。

「待て。何故水を残す?」

俺はなるべく冷たい声で指摘する。

彼女達は多いものだと半分もペットボトルの水を残していた。

「それは…:」

「長距離走破後とはいえ、真水を1.5リットルも飲み干すのは辛いか?」俺は彼女達の代弁をしてやる。「だが、水分補給は個人の嗜好ではない。兵士の義務だ。…:見ろ」

俺は同じ1・5リットル飲料水入りペットボトルを掴むと、瞬く間に一気飲みした。

少女達の視線が俺に集中したところで宣言する。

「どうだ？　ろくに運動していない俺でも、この程度飲み干せるぞ」

すると少女達も俺に倣って一気飲みを始める。さすがに途中でケホケホせき込む個体はいたが、最後には全員が飲み干した。

「よし。では食事にしろ」

「「イエス。マスター」」

——あんな目で俺を見るなよ……。

俺は少しばかり悲しくなった。先程俺が一気飲みを終えた後、少女達が向けた眼差しに尊敬の色があったのだ。

——この連中は物分かりがよすぎる。

俺は自分を『生徒たち嫌われる役』だと思っていた。そもそも、新人教育など、多かれ少なかれそんなものである。どこぞの鬼軍曹よろしく、訓練終了後に訓練生に銃殺されるぐらい嫌われるのが、丁度いい。

なのに、この娘たちはそんな俺を慕っている気配すらある。これを異常と言わずして、何と……

「勘違いしないで下さい」

唐突に金髪美少女の一体——エムイレブンが声をかけてきた。

「私はあなたが嫌いです」

「そうか。では、全員食事にしろ……母の手料理は美味しいものだぞ」

俺はそう言って、職員室に向かった。

そして、俺は職員室で嘔吐した。

あの美味かった刺身も全て汚水に流す羽目になった。実にもったいない。

それでも、澄まし顔で職員室の水飲み場までやってこれたのは幸いだった。

おかげで【娘たち】にその無様な姿を見られる事はなかった。指導教官としての面目は守られたはずだ。

「……それで、お前は何故ついてきた？」

「あなたの顔色がおかしかったから」

ただ、マリオンには見られていたらしい。

「嘔吐の理由は？」

「水を無理に一気飲みした反動だ……」

「はあ？」

「……がぶ飲みするとバテるんだよ。だから、あんな飲み方はした事がない。カヴィール砂漠を徒步行軍した時だって、水はほとんど飲まなかった」

「いや、運動生理学的には……」

「わかっている。水分補給はこまめにしないと脱水症状に繋がる。それが医学的な事実だ。がぶ飲みするとバテるのは所詮は経験則だ。だが、俺は元々正規の教育を受けていない。ずっと我流でやってきた。だから、こういう水分補給に体が慣れていないんだ」

マリオンは露骨に呆れ顔だった。「じゃあ、何で無理して飲んだのよ？」

「いい機会だ。俺の体も造り直すさ」

「本音は？」

「……あの【娘たち】が正しいやり方をやっている。そして、俺は年上だ。上に経つ者が範を示さんでどうする？」

「あっそ」

マリオンの表情は形容し難いものだった。こういう時、東洋人は何を考えているのか、わからないので困る。

「それより、例の《シシオウシステム》だ。バクフィックスにはどれぐらいかかる？」

「ああ、それならもう終わっているわ。あたしなりに今回の事案に最適化しておいたから、確認をお願い」

「は？」

「だから、《シシオウシステム》はバクフィックスの上、今回の事案に最適化しておいたの。妙な癖が付いていたから、それも取り除いておいた」

「ちよ、ちよつと待て。お前、あれを扱った事があるのか？」

「ないわよ。だから、半日かかった」

「半日って……あれは独自言語仕様で……」

「独自言語といっても、所詮、Lisp みたいな動的型付け関数型の一つでしょう？ ゼロから構築するならともかく、コードの部分修正だからさ」

「そうは言っても、あの中枢処理は演算結晶だぞ！ 通常のフォンノイマン型とは概念そのものが違う！ 最終ユーザー^{エンドユーザー}に徹しても、慣れない間はエラー連発になるはず……！」

「あのさ、ヤヒヤー？ あたしはね、齢十六でこのプランを任されたのよ。その理由が、

新鮮優良な卵子の大量供給源だった事『だけ』と、本気で思っている？」

「いやそれは勿論純粋な技官として才能も……」

「そう。あたしは当時ようやく実用化された演算結晶——あの【娘たち】の遺伝子からの全細胞表現型予測に最適なシュミレーター——のプログラミングで頭角を示す事が出来たからよ。あの頃は非ノイマン型演算なんて、手探りもいいところだった。だから、十六のあたしも、若さで他の老練優秀な技官を出し抜く事が出来た」

マリオンは虚無的な冷笑を見せた。

「勿論、あれからさらに十六年——今では他の『若手』が台頭しているでしょう。だから、もう一流とは言えない自覚はある。この【学園】に引き籠っているあたしにはそれを確認する術もないけど……」

「……」

「ただ、今もなお三流ではない。二流の水準を保っている自負もあるわ。最終使用者向けシステムの細部調整ぐらいはやってみせる」

「……いやそれでも、『シシオウシステム』に必要な軌道計算はお前の専門外だろ？」

ましてや、俺なら三日はかかる作業だ。それを半日だと……！ シカゴ大学の博士号は化け物か……！

「はあー」マリオンはわざとらしく大きな溜め息をつく。「ヤヒヤー、少しは乙女心を遣いなよ」

「??? 乙女心とプログラミングに何の関係がある？」

「……本当にわからないの？」

「ああ、意味不明だ」

マリオンは「ふっ」と鼻で笑い。

「初恋の相手へ、カッコいいところ見せたいって、乙女心よ」

「なん……だと……!？」

「ヤヒヤー」

「な、なんだ？」

「今まであたし、素直になれなかったけど……」

「だ、だから、なんだ？」

「——ありがとう」

マリオンは健やかな笑みで言った。

しかし、それが俺には魔性に見えた。

「……」

俺は無言でその場を立ち去った。

やばい。

やばいやばいやばい。

心臓が高鳴って高鳴って止まらない！

止まったら止まったで大変だが！

俺は体育館で一人、五十回の腕立て伏せをしながらも、しかし、運動以外による興奮を抑えられなかった。

今回に限った話ではない。マリオンは別に俺を籠絡しようとしていない。

冗談交じりで、【娘たち】とくっつけようとはしている。

しかし、自分自身で俺をかどわかそうとはしていない。

——自分にそんな魅力はないとでも考えているのか……？！

ところが、現実にはマリオンの一挙一動が俺を惑わせる。

今だって、マリオンは別に『魔性』を意図はしていない。俺が勝手にドギマギしているだけだ。だが、だがしかし！

年増の女よりも若い娘——というのが、俺の好みだと思っていた。

女は若くないと健康な子を産めない。実際、マリオンは同じ女でありながら、自分自身ではなく、【娘たち】の性的魅力をこそ、推奨している。高齢出産の愚を避けようとしているのだ。ただでさえ、マリオンの体格は華奢過ぎて、妊娠には向いていない（推測だが、それが代理母ではなく、卵子提供者に止まった一因なのだろう）。それに比べれば、瘦躯とはいえ、長身で性的には豊富な【娘たち】に誘惑させるのは、合理的な上に倫理的でもある。まさに賢者の知恵と言えるだろう。

——だというのに、俺は……！

「恋する男の目」

「……！」

振り返ると、エムイレブンがいた。

美少女が体育館の壁に背を付け、冷たい眼差しを向けていた。

「マスターは幼児性愛好者なのですか？」

「き、貴様は何を言っている？」

「マスターはドクターに欲情しているのでしょうか？」

「だ、だから、貴様は何を言っているんだ？」

「マスターはドクターのような貧乳が好きなのですか？」

「い、いや、仮にそうなら、エムシックスティーン以降でもいいだろう?!」

「ドクターのつるぺたはそれを上回ります」

「そ、そうなのか？」

「ええ。勉学の一環として、よく触らせてもらいますが、あれはいわゆるA A級ですね。実際、ノーブラでもほとんど支障はないそうですし」

「そ、そうか。小型軽量高性能なんだな……。まさに古き良き日本製品、文字通りの大和撫子という訳だ……」

「……要はあれですか？ マスターはインテリ女に弱いと？ だから、シカゴ大学博士に夢中であるか？」

そこで俺は我に返った。

「だ、だだだだだ、黙れ！ エムイレブン、こ、これは命令だぞ……！」

「……イエス。マイ||マスター」

その溜め息交じりの返答が、何故か『このへタレ……』に聞こえた。